

## 大阪フィルハーモニー交響楽団 第 536 回定期演奏会 曲目解説

中村 孝義

(大阪音楽大学名誉教授・音楽学)

井上道義が 2 年ぶりに大阪フィルの定期に帰ってきた。井上の在任中にこのコンビが残した大きな成果は、今も大阪フィルの聴衆の耳の中にしっかりと刻まれており、それを懐かしく思う人も少なくないだろう。とは言ってもこのコンビ、定期ではないところでそれなりに共演を重ねているので、井上が首席指揮者を離れたからといって両者の縁が決して薄くなったわけではない。ただ定期演奏会はやはり特別な意味を持つ演奏会で、大きな期待を抱かずにはいられない。今回もまたまた井上ならではの刺激的なプログラミング。何とストラヴィンスキーの、作曲時期も作風も全く異なる 2 作品を大胆に並べ、その前に、なぜと思わせるハイドンとモーツァルトの初期の交響曲を 2 曲並べるというちょっと普通ではないひねりの効いたもの。しかし実は、これにもしっかりと意味があるのだがそれは聴いてのお楽しみ。早速ハイドンの交響曲から耳にしていくことにしよう。

### F. J. ハイドン (1732~1809) : 交響曲 第 2 番 ハ長調 Hob. I :2

同じ交響曲といっても、生涯に 100 曲以上もの作品を残したハイドンや、わずか 35 年の短い生涯で 50 曲以上もの交響曲を残したモーツァルトにとっての最初期の交響曲を、ベートーヴェン以降の作曲家たちの第 1 番などと比較して論じることは基本的に間違っている。彼ら二人にとって、初期の作品は、あくまで作曲家として独り立ちしていく途上にあるときの習作的なものであった。ただそうは言っても、どこかきらりと光るものがあるのが、彼らが大作曲家たるゆえん。彼らはすでに若い、あるいは幼少の時代から人の耳や心に残る何かを備えていたのである。

最初に演奏されるハイドンの交響曲第 2 番は、ハイドンがシュテファン寺院児童合唱団を 1749 年に辞し数年間の様々な活動を経て、フュールンベルク男爵家の音楽家 (1757~59 年頃)、さらにはモルツィン伯爵家の楽長 (1759~61) として活躍していた頃に作曲したものと考えられている。いわゆるイタリア序曲風の急 - 緩 - 急の 3 楽章から構成されており、第 1、第 2 楽章はソナタ形式、第 3 楽章はロンド形式によって書かれている。

### W. A. モーツァルト (1756~1791) : 交響曲 第 5 番 変ロ長調 K.22

こちらの方は、モーツァルトが父親と出かけたパリ・ロンドン旅行の帰途 (1765 年 12 月=9 歳)、立ち寄ったオランダのハーグで作曲し、翌 1766 年の 1 月に同地で行われた演奏会で初演されたもの。モーツァルトはロンドンでも数曲交響曲を作曲しているが、曲の形式はそれらと同じで、やはりロンドンで会い影響を受けた大バッハの末子クリスティアン・バッハや彼の盟友カール・フリードリヒ・アーベルなどのものを手本とした習作である。ただわずか 1 年ほどの差ながら、表現はより感情豊かになり技術的にも進歩が見られる。9 歳とはいえそこにはさすが天才の片鱗が窺われるといってもよいだろう。ソナタ形式によるアレグロ楽章である第 1 楽章、三部形式によるアンダンテ楽章の第 2 楽章、ロンド形式によるモルト・アレグロ楽章の第 3 楽章の三つの楽章からなる。

## I. ストラヴィンスキー (1882~1971) : ヴァイオリン協奏曲 ニ長調

今日メインで演奏される「春の祭典」を始め、彼の3大バレエ作品などを中心にストラヴィンスキーという作曲家のイメージを作ってくられた方は、それらとこの作品の作風の違いに驚かれるかもしれない。実はストラヴィンスキーは、よく「カメレオン作曲家」などと揶揄されることもあるように、その作風をたびたび変えたことで知られる。もちろんどのような作曲家でも、彼を取り囲む環境の変化や内面の変化に伴って作風を変えるのはごく普通のことである。ただストラヴィンスキーの場合、その変化が、同じ作曲家がここまでと思うほど余りにも劇的であったため、多くの人に衝撃を与える結果となったのである。

ストラヴィンスキーの創作活動はおおよそ3つに分けることができるが、あとで聴く「春の祭典」(1913)はその第1期、つまり彼が音色としては原色的、表現としては野性的、表出的な面を強く打ち出していた、いわゆる「原始主義」「民族主義」と呼ばれる時代に属する作品であった。しかしこのヴァイオリン協奏曲は、それとは全くスタイルを異にする第2期の新古典主義のスタイルに基づく作品なのである。大成功を収め、彼の名を一躍高めた原始主義的、民族主義的作風を捨て、なぜ新古典主義的作風に移行したかを簡単に説明することは難しいが、1917年のロシア革命によって経験した祖国の喪失が、これまで前面に押し出してきた民族的なものに頼るのではなく、自らの作曲の拠り所として、いっそう普遍的な性格を持つハイドンやモーツァルト、さらにはバロック時代の厳格な音楽書法の探求へと向かわせることになったのはおそらく間違いあるまい。この曲に先立って今日ハイドンやモーツァルトの初期作品がプログラミングされたのは、まさにこの作品を耳にするときの、井上が考えた聴衆の耳への布石であったといえるだろうか。

このヴァイオリン協奏曲は、彼が「新古典主義」への転向を宣言した1927年から約4年後の1931年春に着手され、彼のお気に入りであったヴァイオリニスト、サミュエル・ドゥシュキンの技巧上の助言やヒンデミットなどの助言を得ながら作曲が進められ、同年秋に完成した。もともとストラヴィンスキーは、彼の作風からしてヴァイオリンのロマン的な甘美さを余り好んではいなかったようだが、むしろそれがこの楽器に対し客観的な姿勢をとらせ、この作品に今までのヴァイオリン協奏曲にはない新鮮な楽想や興味深い発想を与えることになった。

曲は大編成による4楽章の構成をとるが、響きは贅肉を削いだ非常に透明簡潔なもの。管弦の洒脱な色彩感や表情の軽快さは実に味わい豊かだが、演奏時間はわずか20分ほど。まさに彼が標榜していた「新古典主義」の洗練されたスタイルを絵に描いたような作品である。それだけに演奏者の手の内がすべて見えてくるような難曲でもある。

### ストラヴィンスキー : バレエ音楽「春の祭典」

20世紀に生み出された斬新なアイデアを持つ作品は、多かれ少なかれ物議をかもしることが少なくなかったが、ストラヴィンスキーのこの「春の祭典」ほど、大きなスキャンダルを引き起こした作品もないだろう。この作品は、ストラヴィンスキーが前作「火の鳥」の完成間近に、たまたま思いついたロシア原始時代の異教徒たちのいけにえの儀式を題材に、ロシア・バレエ団のディアギレフの委嘱によって1911年に着手され1913年春に完成されたものである。同年5月29日、パリのシャンゼリゼ劇場で、ニジンスキーの振り付け、

モントゥーの指揮、ロシア・バレエ団のメンバーによって、120回（！）もの入念なリハーサルを経て初演されたが、演奏が始まった直後から作品を嘲り笑う声が会場のあちこちで漏れ、それはしだいにあからさまな非難の怒号となっていった。もちろん中には作品を支持する声もあり、それだけに会場はまさに賛否入り乱れての大混乱と化したのであった。

なぜこのような騒ぎになったかといえば、それはこの作品が、今までになく斬新で、保守的な耳を持つ聴衆にとっては破天荒な音楽と聞こえたからに他ならない。その斬新さとは、まず何よりも、複雑な、それでいて激しい生命力と表出的な力を持ったリズムにあった。次から次に起こってくる声部間で異なる拍子とリズムの拮抗作用、さらには変拍子や複調などが生み出す激しい野性的な表出力は、聴くものの予想を随所で裏切ることによって、大多数の聴衆に大きな驚きを与えることになったのである。

上のように言えば、いかにも秩序を失った無軌道で大胆な作品と思われるかもしれないが、実はそうした大胆さは、すべてストラヴィンスキーの細心で緻密な計算に基づくものなのであった。「春の祭典」の手稿譜を見ると、そのまるで印刷譜のように美しく精密なことに驚くが、そのことから分かるように、また彼自身はその著作「音楽と詩学」で明らかにしているように、彼において創作とは、「自己の内面の感情や心理や個性の表出」というようなものではなく、まるで「中世の職人」のように、自然によって与えられた素材を加工する行為のようなものであった。つまり彼の作曲において重要なのは「ロマン的な個性の発揮や内面的な情緒の表出ではなく、精神的思索という知的な作業とその作業の所産としての音の緻密な秩序と統一性」ということだったのである。

「春の祭典」は、こうした思想に基づいて、最初に発想された素材をいかに加工し、いかにそれらを組み合わせ、いかに緻密に構成したかの典型的な例だったという訳である。例えばブルーーズや船山隆などによって明らかにされたその精緻なリズム構造をここで詳しく述べることは出来ないが、それは古典派の音楽における主題労作のような、力動的で有機的な音の展開の仕方とはまったく異なっている。様々なリズム要素を、反復したり変奏させたりしながら、客観的に結合させ堆積させ組み合わせる方法によって生み出される「春の祭典」の音楽は、内面的な感情や情緒表現を目的とするロマン的音楽とは基本的に異なっているのである。つまりあらゆる瞬間に新しい音響に出会い、その瞬間的な音響との出会いの「驚き」こそが最高の喜びとなる、いわばこれまでになかった音楽世界を創造したのが「春の祭典」なのであった。

この音楽に表現された精緻なリズム構造を持つ音響世界や音楽的時間の生成の凄まじさを、井上道義と大阪フィルハーモニー交響楽団がいかに織り成していくかを、耳を研ぎ澄まして聴き、体験して頂けたらと思う。